

巻頭言

ケースから学ぶこと

湘南慶育病院 丸山 祥

「ケースから学ぶこと」は、作業療法において非常に身近で効果的な学習方法である。つい先日、学術大会で作業療法のケースを報告する機会を得た。この「ケース」とは、作業療法の担当クライアントとの作業療法プロセスのことである。リハビリテーション部門長になりたての私は、慣れない仕事に戸惑いながら、慌ただしい状況のなかでケースをまとめる作業をしていた。作業療法実践のケースをまとめるのは実に5年ぶりだったが、管理職になったいまだからこそ、どうしても取り組みたいと思っていた。私にとっては、クライアントとの経過を思い出し、自分なりに工夫できたことと、気が付けていなかった自身と次への課題を認識でき、クライアントへの感謝の気持ちと臨床現場の責任を感じる時間であった。これまでの作業療法の実践家としての学びを振り返ると、さまざまなケースを経験し、その経験から学んできたことを改めて感じた。つまり、私にとって、ケースをまとめる作業は、作業療法士としてのやるべき仕事を認識し、成長するために重要な行為であったと思う。また、一緒に発表をしていた新人作業療法士のケース発表の準備も手伝った。彼女らのケースからの学びを聞き、すごく素敵な作業療法をしているな、作業療法っていいなと改めて感じた。

作業療法教育における「ケース」とは、教育的な対象（学生や後輩作業療法士）の学習過程や成長過程と言える。そして、作業療法の実践領域の拡大に伴ってより多様になっている。スペシャリストを育成すること、適正な組織運営ができるマネージャーを育成すること、社会変革を担うリーダーを育成すること、さらには国際的な舞台で活躍できる作業療法士を育成することが求められているのである。他方、教育者の観点では、作業療法養成校の教員だけが教育のことを考えれば良いというものではない。特に、作業療法学生から作業療法士への移行、そして、臨床での教育者の育成は喫緊の課題である。作業療法教育の議論に対し、これまで以上に臨床現場の作業療法士が参加していくことが必要だと考える。しかし、臨床現場の管理者や教育者は、必ずしも教育学の専門知識や臨床教育の研修を受けていない場合が多く、卒後教育のためのリソースや機会が不足しているのも現実である。

これからの作業療法教育では、教育理論や教授方法、教材、評価方法を改善していくためにも、さまざまな教育の「ケース」を通じた学びの積み重ねを大切にしていきたい。また、教育現場での「ケース」をどのように扱い、どのように学びを深めていくかを改めて考える必要があるだろう。小生も臨床実習指導の経験を報告した（丸山ら、2018）。具体的な教育経験を振り返り、ケースとしてまとめる作業は、学習者への感謝の気持ちと教育に携わる責任を感じ、臨床実習指導者として成長するための重要な行為であった。今後、作業療法養成教育でも臨床教育でも、作業療法教育のケースが報告され、さらなる学術的議論が展開されることを期待したい。「ケースから学ぶこと」は作業療法の教育においても非常に身近で効果的な学習方法である。

・丸山祥，神保洋平，長谷龍太郎，小林隆司：診療参加型の作業療法臨床実習におけるリフレクション・シート使用の試み。作業療法教育研究 17（2），27-33，2018。